ちょっと足を延ばせば
そこにはもっと素敵な長鳥が･･･

長鳥三虚空蔵（山本・鼻岳・杉平）

長鳥地区には虚空蔵尊が３カ所祀られている。
山本の「力満虚空蔵尊」、鼻岳の「福満虚空蔵尊」、杉平の「能満虚空蔵尊」である。一地区に三尊が揃っているのは全国的にも珍しいと言われている。
能満寺には三虚空蔵が一体となった秘仏（ご本尊）が安置され、住職一代で１回だけの公開が許されている。

鳥谷城（とやのじょう・標高201mの独立峰上）

別名、長鳥城（ながとりじょう）、鳥男城（となじょう・とりおじょう）とも呼ばれている。
越後の覇者が新田氏から高氏へ、高氏から上杉氏へと代わるごとに城主も交代し、南北朝時代の悲哀を象徴する山城である。

アグリパーク大角間（大角間）

休耕していた通称「ねずみ田」という棚田を活用し、メダカやトンボなどが生息するビオトープやヒマワリ、アジサイ、ソバなどを組み合わせた住民手づくりのミニ農村公園を整備。名づけて「アグリパーク大角間」と呼び、訪れる人々の心と体を癒してくれる。

～　過疎が進み限界集落に近づいている
杉平集落が百年先まで続くことを願って～

杉平百年プロジェクト（杉平）

千本の桜が咲き乱れ、いつまでもこの里で暮らしたいと思えるような魅力と活気と笑顔があふれる地域づくりに取り組んでいる。
オープンガーデン・鳥谷城の遊歩道整備・長鳥工房・検校塾の開催・墓地公園整備ほか

「炭置きと粥占い」の神事（山本・熱田社）

農作物の吉凶を占う「粥占い」（小豆粥）と一年間の天候を占う「炭置き」の神事が１月14日の夜、山本・熱田社で村人たちの手で行われている。この神事は県内でも無形民俗的に珍しいとされている。

野の俳人　五十嵐牛喆（ぎゅうてつ）翁（山本）

明治37年から大正14年にかけ、俳壇の重鎮として活躍した山本出身の五十嵐牛喆翁は、大谷句佛が主催する「懸葵」に関わり選者にもなった。地元の同好と北吟会を結成し、刈羽郡・三島郡の俳壇の中心にもなった。
十日市の野風ヶ丘には、門下生が建てた翁の句碑と野風会の人の句碑がある。

勝海舟のルーツを訪ねて

長鳥いにしえロード

北条ふるさと市場「暖暖（だんだん）」

喫茶交流コーナー

特産品コーナー

総菜･地元野菜･特産品の販売、高齢者総菜パックの宅配、軽食

場所：JR信越線「越後広田駅」徒歩3分、北条コミュニティセンター前
営業時間11:00～16:00（食事11:30）定休日：日・月曜日　電話25-3211

北条の特産品　緑のなす「つららなす」

北条の特産品「つららなすは」、雪国の土壌が育んだ黄緑色の美しいなすです。
元肥に地元産牛堆肥をたっぷり使い、減農薬で栽培しております。アクは少なく甘みがあり、生食でも安心。あなたの料理のレパートリーが広がります。
収穫は７月中旬～９月下旬

つららなすの花

―交通アクセス―
北陸自動車道「柏崎IC」から「長鳥駅」まで車で20分
JR信越線「長鳥駅」から長鳥いにしえロード一周徒歩で90分

お問い合わせは
柏崎市北条地区コミュニティ振興協議会
〒949-3724　新潟県柏崎市大字大広田93番地1
電話　0257(25)3355　FAX 0257(25)3354
e-mail　c-kitajo@city.kashiwazaki.niigata.jp

長鳥いにしえロード

N
③米山検校御礼塔
④米山検校生家
⑤咸臨丸
検校塾
（長鳥工房）
至 国道8号線
杉平
米山検校御礼塔
能満虚空蔵
能満寺
鳥谷城趾
長鳥川
大角間
県道 柏崎・越路線
旧北条北小学校
鼻岳
⑥中村の大杉
中村
アグリパーク大角間
⑦秀快上人
入定堂
福満虚空蔵
県道 柏崎・小国線
①長鳥駅
真珠院
熱田社
岩之入
米山検校御礼塔
力満虚空蔵
山本
JR信越線
至 柏崎市街
広田駐在所
②弘法大師霊塩水
越後広田駅
大広田
至 柏崎
暖暖
北条コミュニティセンター
至 長岡

① 長鳥駅（ながとりえき）

住民運動10年の泣き笑い

築堤に島式ホーム１面２線を有する地上駅

歴史：昭和 18 年（1943） 9 月 1 日　長鳥信号場として開設
昭和 28 年（1953）12 月 15 日　駅に昇格・開業
昭和 62 年（1987） 4 月 1 日　国鉄分割民営化で、JR 東日本の駅となる。

戦時中の信号場に始まり、10 年間に及ぶ悲願の住民運動の末に駅舎が完成した長鳥駅。

全国の JR 線では唯一、上り下り併用のホームが１本だけという「島式ホーム」が今に伝える住民の苦闘を物語っている。

長鳥駅は昭和 18 年、戦時国策の信号場として、越後広田駅と塚山駅間に設置。当時は単線の鉄道で、信号場は軍事列車を優先通過させるために全国的に設けられたもので、住民の乗降はできなかった。

昭和 19 年、地元有志が「長鳥区有志会」を結成し、信号場での仮乗降を旧国鉄に請願する住民運動を起こす。その２年後には認可を得て、上り下り２本の列車を利用できるようになり有志会は解散。仮乗降に伴うホーム建設、待合室の整備など全て地元負担だった。

昭和 21 年、長鳥地区全集落の同意のもとで「長鳥駅昇格請願委員会」を組織した。県内の殆どの信号場が３年後には駅に昇格する中で、長鳥駅は地形上、駅の設計規模の問題などで運動開始から５年半後に駅に昇格、８年後にようやく開業した。

駅舎の建設費は全額請願者負担となり、当時９集落・425 戸が半額以上をまかなった。米価１俵（60kg）が 3,000 円の時代、各戸平均８万円余りを負担した。

ローカル線にのんびり揺られて長鳥駅で下車。駅舎から一歩外に踏み出せば、そこは生命力あふれる自然の宝庫、歴史と文化の香るまち北条（きたじょう）。そんな古のまちの里道をマップ片手に歩いてみませんか。

長鳥いにしえロード

病も飢えも　ないように
みんなの願いを　み仏に
入定さまが伝えます
遥かに望む　長谷の空

苦しむ村へ　江戸からは
検校さんより　米の蔵
ようやく村は　救われて
心は未来へ　繋ぎます

杖の先には　塩水が
湧いて助かる　村人に
弘法さまの　ご遺徳が
法雨の中に　浮かびます

音楽劇「長鳥の久遠い流れ」挿入歌

② 弘法大師霊塩水（こうぼうだいしれいえんすい）

今から 1200 年前、塩のとれない山里に弘法大師が霊塩水をもたらしたという伝説に由来する。山沿いでの塩水井戸は珍しく、戦中・戦後は荒浜や出雲崎からも荷車を連ね、汲みにくるほど重宝された。今でも塩水はこんこんと湧き出ている。

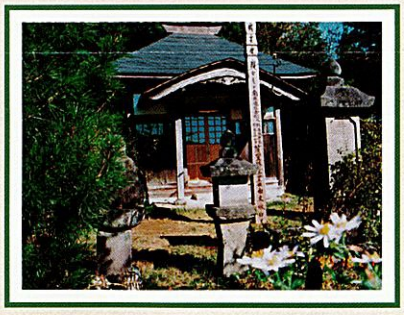
毎年２月中旬、弘法大師を讃える祭りとして「弘法大師霊塩水祭」が催されている。

伝説によると、今から 1200 年ほど前の夏の夕暮れ、一人の旅僧が岩之入にやってきた。あまりにもみすぼらしい僧の姿に誰も泊めてくれなかったが、村外れの貧しい老婆は「夜露をしのぐだけのお宿は構いませんが、ご坊に一飯を差し上げる味噌も塩も今は切れ申した」と言い、塩気のない芋粥を出してくれた。僧はそれだけで心は癒された。

翌朝、僧はいとまごいする門口で、「一宿のお礼に塩水を出して進ぜよう」と言ってお経を読みながら錫杖を高々と掲げ、地の一角に烈迫の気合とともに突き刺した。するとその先から塩水が湧き出たのである。

その僧は真言宗開祖の弘法大師（空海 774～835）と後に分かり、村人はその井戸を「弘法さんの塩水井戸」と呼ぶようになった。

当時、塩は貴重なものとされ、村人たちはこれに感謝してお堂を建立した。



⑦ 秀快上人入定堂（しゅうかいしょうにんにゅうじょうどう）

柏崎市文化財　平成３年（1991）９月指定

秀快上人は享保３年（1718）、藤井の旧家竹田久左衛門の長男として生まれ、９歳で真珠院に弟子入りした。22 歳から本山長谷寺で 14 年間、その後、刈羽村善照寺で６年の修行を合わせ 20 年間勉学にいそしみ、宝暦４年（1754）、36 歳で 22 代真珠院住職となった。

50 歳にして深く入定を決意し、五穀を断って菜食で修行すること３年。入定１年前には、檀家や近隣から浄財を集め、木造堂と石室を建てるなど入念な準備の後、安永９年（1780）３月21日、入定する。

享年 62 歳。その姿は橙色の袈裟（けさ）をまとい、左手には慈悲を施す五鈷鈴を鳴らし、右手には煩悩・悪除けの五鈷杵を握りしめていた。この年月と年齢は真言宗の開祖空海が入定された日と同じである。このことからも、終生師事してやまなかった空海への信仰心の深さを知ることができる。

入定の動機は明確ではないが、悩み苦しむ人々を仏の加護より救済しようとしたのは確かであろうが、この具体的事柄は凶作による飢饉である。22 代住職が継いだ年は、宝暦４年の大凶作で長鳥村は飢人が多数出た。

この時、江戸の米山検校（けんぎょう）が蔵米を買い取り、ふるさとの貧民に米を施しているが、その後も時々起きる凶作は農民を苦しめたことから、自らが仏身になることで悟りを開き、永遠に世の中の平安を願おうとしたのであろう。

入定堂の改修工事（平成２年６月から）に伴い、ミイラ研究の第一人者である昭和女子大学の松本昭文学博士が開堂・学術調査を行った。また、聖マリアンヌ医科大学の森本岩太郎医学博士が遺体調査と復元・保存作業を行った。結果、石室に残された古代インドのサンスクリット語や入定堂を囲む塔婆の表記などから、上人が弥勒の世界を再現し、仏教上の信念から世の平安と終生救済を願ったものと分かった。真言宗の教学道場だった長谷寺で修業を積んだ学問僧の実証例は我が国初めてとされる。

よねやまけんぎょうおれいとう
米山検校御礼塔
③
勝海いにしえロード

宝暦の大飢饉で郷土の窮状を知った米山検校（勝海舟の曾祖父）は、私財を投げ打って長鳥村の窮民を3カ年もの間救済した。この礼塔は貧しさの中で必死に残した村人たちの感謝の証である。

③ 米山検校御礼塔（よねやまけんぎょうおれいとう）

米山検校は元禄14年（1701）長鳥村平沢の山上徳左衛門の子（銀一）として生まれる。

幼少にして失明、7歳で母と死別したが、検校はこれらの逆境にも負けず、8歳のころ、三島郡片貝の座頭宿で「灸」や「あんま」を習った。

きかん坊だった検校は、仲間と喧嘩して送り帰されたが、父はそんな検校の将来を案じ勘当した。その後、塩沢の叔父や叔母に世話になるが、17歳で一念発起して江戸へ。

幸いにも幕府お抱えの医師石坂宗哲（小千谷出身）に出会い、屋敷内での生活が許され、そこで鍼灸を学んだ。やがて独立した検校は、鍼灸とともに金貸し業も営むようになった。

10年経たずして巨万の富を得た検校は、盲人官位最高の「検校」の位につき、米山検校と称した。その後、旗本男谷家の株を手に入れ、息子の平蔵に継がせた。この平蔵の子小吉が勝家の養子となり、その子麟太郎が勝海舟。小説「父子鷹」でも有名である。

宝暦5年（1755）から打ち続いた大凶作の折、郷土長鳥郷の百姓の困窮を知った検校は、白河藩主（上越市高田）に願い出て蔵米を買い受け、3カ年もの間救済した。

岩之入のセナカ峠（十二の木）と大角間入り口に建立された二基の御礼塔、そして平沢にある米山検校之塔は、村人たちが貧しさの中で必死に祀り残した検校への感謝の気持ちであり、検校の人間愛・ふるさと愛を今に伝えている。

米山検校（男谷検校）は臨終直前、9人の子供を枕元に呼び、貸付証文を前に遺産の配分を話しかけると、兄弟は口々に分け前を主張し始めたので検校は貸付証文を火鉢に投じた。子供たちがただ茫然としている間、検校の涙は貧民の涙として流れつつ深い眠りについた。時に明和8年（1771）、70歳であった。

杉平の御礼塔

米山検校之塔再建　市之口村
蓮操院男谷先検校白眼現正居士
弘化□□午歳六月二十五日　施主作右エ門
□□・・・・・・・・・・□□

大角間の御礼塔

岩之入・セナカ峠の御礼塔

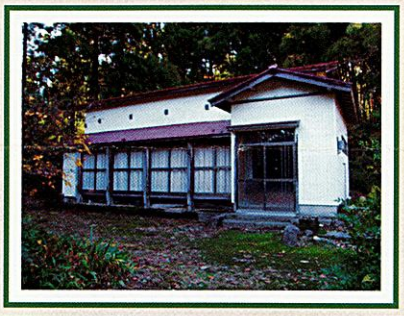
碑文

卍　宝暦八歳
米山検校御礼塔等　飢人
寅　三月　敬白

右　宝暦八歳　岩之入村
正面　三年間困窮附米山検校依養
左　延命□□為恩忘
右事□□□□□□　者也

両親の墓

勝海舟の曾祖父米山検校は東長鳥（杉平）出身。その米山検校は、盲人という障害を克服、自立し、飢饉に苦しむふるさとの村人を救ってくれました。そんな検校の生き方は、今日の福祉・教育のあり方に示唆を与えてくれるようです。



よねやまけんぎょうせいか
米山検校生家
④
勝海いにしえロード

米山検校は元禄14年（1701）、山上徳左衛門の子（銀一）として長鳥村平沢のこの家で生まれた。幼少にして失明したが、困難に耐えながらも明るく聡明な少年は17歳で一念発起して江戸に出た。

④ 米山検校生家（よねやまけんぎょうせいか）

米山検校は元禄14年（1701）、山上徳左衛門の子銀一としてここ長鳥村平沢で生まれた。

なかむらおおすぎ
中村の大杉
⑥
勝海いにしえロード

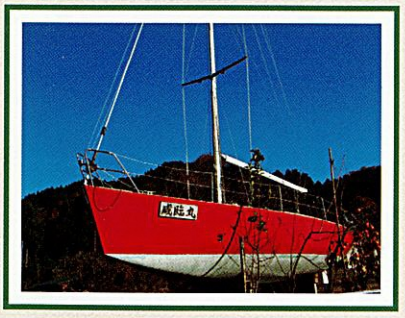
白山神社の御神木：新潟県指定天然記念物
千年の樹齢を保ち、今なお栄えていることから「長命杉」とも言われている。

⑥ 中村の大杉（なかむらのおおすぎ）

白山神社の御神木　新潟県指定天然記念物
昭和31年（1956）3月23日指定
樹高：35m／目通り幹囲：7m／推定樹齢：伝承1000年

千年の樹齢を保ち、今なお栄えていることから「長命杉」とも言われ、長命にあやかる参拝者が多い。また、1本の幹から蘚蒼と太枝が差し交わし、一樹で森をなす姿は老樹の偉容を誇っている。

■大杉にまつわる言い伝え
1　ときの庄屋だった佐藤正治さんの先祖が白山神社の境内に植えられた。
2　主幹北側の地上約4m付近から出ている大きな枝の付け根に乳房のような形をした瘤がある。乳の出ない人が、その瘤から滴る雫を飲ませたら乳児が丈夫になったといわれ、乳神様として信仰を集めた。
3　歯が痛いとき、この杉の皮で虫歯をつっつくと痛みがとれた。
4　国の大難事には経文を唱えた。支那事変の起きた時も毎朝4時ころから30分、1カ月くらいその声を聞いたという人が数多くいた。



かんりんまる
咸臨丸
⑤
勝海いにしえロード

米山検校の曾孫・勝海舟は万延元年（1860）、咸臨丸を指揮して太平洋を横断した。杉平住民は勝海舟の偉業と功績を後世に伝えるため、「咸臨丸」をここに設置した。

⑤ 咸臨丸（かんりんまる）

米山検校の曾孫・勝海舟は万延元年（1860）、この咸臨丸を指揮して太平洋を横断した。

幕末の動乱期に日本近代化の歴史的象徴として活躍した咸臨丸は、木造で3本のマストを持つ蒸気船。ここに設置した「咸臨丸」は実際のイメージとは異なるが、地元杉平集落の人々が米山検校の曾孫・勝海舟の偉業を称え、その功績を後世に伝えるために設置した。

咸臨丸の晩年は戊辰戦争の渦に巻き込まれ、軍艦から北海道への物資運搬船となり、数奇な運命をたどった。